

## 強風

レモン色の花はヴェランダの向こう  
手摺に身を乗り出す僕の髪は乱され  
全ては地に貼りついたまま  
強風に激しくなぶられながらも  
なお同じ場所にしがみつこうと歯を食いしばる

風の吹き過ぎる彼方には見知らぬ地が  
魅惑に満ちた新しい感動が  
胸を拡げて悩ましげに招いているのに  
誰ひとり、何ひとつ、この地を離れ  
出発とうとはしない

それは怖れのためなのだろうか  
それは諦めのためなのだろうか  
強風に逆らって身を屈して甘んじ  
ただ堪えているばかりなのは  
誰もが胸の奥に憧れを持っていながら

木々は激しく弓なりにたわめられ  
草花は容赦なく吹き倒され  
人々は帽子を飛ばされ、部屋でふるえ  
まるで罪にさらわれるのを怖れるように  
ただじっと強風の止むのを待っている

曇って薄暗い道に出て歩いてみると  
全てのものが頑なに身をこわばらせていた  
知っていたのだ、自分の弱さを  
それらは皆、私に訴えていた  
こうするよりほか、仕方がないのです、と

私に何ができたろう、立ちつくす以外に  
吹き過ぎる風の侮蔑と嘲笑を見送り  
ただ己が憧れを崖から投げ棄てるよりほかに・・・  
そして、それでいいのだ  
それいいのだ

(1985.5.5)